

【広島】新病院では在宅医療にも注力、開業医と連携して後方支援-天野純子・医療法人ハートフル理事長に聞く ◆Vol.2

明治期から往診、現在は2人の医師が200人を訪問

2025年10月29日 (水)配信 m3.com地域版

2025年9月1日に開院した「アマノ病院」（廿日市市）は、新たに設けたコミュニティセンターを拠点とし、医療やケアをワンストップで提供する「コミュニティホスピタル」を目指す。専門家と協力して総合診療医の育成を図り、同院が以前から注力してきたリハビリや長く行ってきた在宅医療も絡め、新たな病院像をつくりたい考えだ。運営母体である医療法人ハートフルの天野純子理事長に、法人が培ってきた強みを聞いた。（2025年9月9日オンラインインタビュー、計3回連載の2回目）

▼第1回は[こちら](#)

▼第3回は[こちら](#)



天野純子氏（病院ホームページから引用）

C&CH協会と提携、総診プログラムを展開できる体制へ

——アマノ病院はコミュニティホスピタルを目指そうとコミュニティセンターを開設しました。実現に向けてどのように取り組んでいくのでしょうか。

具体的には、先に紹介した藤田医科大学総合診療科の大杉泰弘教授が理事を務めている一般社団法人「コミュニティ&コミュニティホスピタル協会（C&CH協会）」（東京都台東区）と提携し、大杉先生を中心にご指導いただく予定です。今後、大杉先生をコミュニティセンター長に迎え、大杉先生が実践する総合診療プログラムを当院で展開できる体制をつくりたいと考えています。診療面ではコミュニティセンターを拠点に患者さんの状態をリアルタイムで把握して各専門医が連携して対応。教育面では総診プログラムに則って総合診療医の育成を図りたい考えです。

コミュニティホスピタルの役割として、高齢者救急に対応していきたい思いもあります。現在、団塊の世代全員が75歳以上の後期高齢者になることに伴う「2025年問題」が救急の現場にも起きており、高齢者救急の患者さんが増えていると言われています。これらの患者さんを急性期病院が全て対応していると疲弊してしまうため、専門医と多職種が揃う当院がその受け皿となり、地域医療の役割分担を図りたい考えです。

後期高齢者増で在宅ニーズさらに増、地域完結型の医療を

——過去に取材したコミュニティホスピタルを目指す病院の幹部は「在宅医療」もキーワードに挙げていました。

「地域を多面的に支える」コミュニティホスピタルのコンセプトを踏まえ、在宅医療も注力していきたい分野です。当院は創業者の曾祖父や母の代から通院の難しい患者さんへ往診を行い、1997年ごろからは旧アマノリハビリテーション病院の前身であるアマノ病院でも在宅医療を行ってきました。現在は専任の医師2人体制で居宅の患者さん200人ほどを訪問しています。退院後に通院が難しくなった患者さんのほか、急性期病院からターミナルケアを行ってほしいと紹介されることもあります。

廿日市市の人口は2025年8月1日現在、11万4764人であり、高齢化率は31.96%。これは、2024年10月1日時点における全国平均の29.3%を上回ります。市の推計によると、高齢化率が今後さらに高まる中でも特に後期高齢者の伸びが大きいとされ、2025年以降、75歳以上の割合は65～74歳の割合を上回る見込みです。大杉先生も話されていましたが、自分の住み慣れた自宅で最期を迎えたいと思う人がこれからもっと増える可能性があります。当院としては地域の在宅医の先生方と連携し、地域完結型の在宅を目指したいです。病院の特性を生かし、緊急時の入院受け入れなど後方支援も行いたいと考えています。

リハの先駆者・上田氏の講義を聞き、20代で方針転換

——アマノ病院は今までリハビリに注力してきました。この特性は「リハビリや在宅をワンストップで提供する」コミュニティホスピタルの実現に寄与しそうです。

私が病院を継いでからリハビリに注力してきました。私は1987年に東海大学医学部を卒業後、外科医として5年ほど経験を積みました。広島大学病院第一外科や加計町国民健康保険病院外科（現安芸太田病院）のほか、天野医院にも外科医として勤務しました。その中で、急性期医療を終えた患者さんをサポートしていく大切さを強く感じるようになりました。手術して命は助かったものの、肺炎や認知症が進んでしまったため退院できず、家に帰れないまま亡くなってしまう人がたくさんいたためです。手術はうまくいっても身体機能の低下などで寝たきりになってしまうことに、医師としては歯がゆい思いをしました。

今から35年ほど前の当時、医療の世界にはまだリハビリテーションの概念が浸透していませんでした。しかし、この時もある先人の講義を聞き、活路を見出しました。それは、日本のリハビリテーション医学の基礎を築いた上田敏（さとし）先生です。上田先生は1964年に東大病院リハビリテーション部門の専属医となり、1984年からは同大教授として専門医の育成や研究を主導しました。日本リハビリテーション医学会や国際リハビリテーション医学会の会長も歴任しました。

上田先生は「リハビリテーション」の由来がラテン語にあり、「re」と「habilis」を組み合わせで「再び適した状態にする」という意味になること、それは単に身体的機能の回復を意味するのではなく、その人らしく社会で生きるための権利を回復する「全人間的復権」であることを説かれました。こうした上田先生の話に、私は目が開かれる思いでした。「これからはリハビリを中心に地域医療を行っていこう」。そう、決意しました。

◆天野 純子（あまの・じゅんこ）氏

1987年東海大学医学部卒。広島大学病院第一外科、加計町国民健康保険病院外科（現安芸太田病院）を経て、1990年に曾祖父が開設した天野医院の外科に勤務。1997年医療法人フェニックス（現医療法人ハートフル）理事長に就任し、現在、アマノ病院リハビリテーション部門長を兼任する。日本リハビリテーション医学会専門医など。

【取材・文＝医療ライター庄部勇太】

